

---

# サンドバッグの夢を見た

游太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サンドバッグの夢を見た

### 【Nコード】

N8762M

### 【作者名】

游太

### 【あらすじ】

サンドバッグにされた男の子と、サンドバッグになりたい男の子の話。

アキラに初めて会った時のことは、今でも忘れられない。  
忘れたくても忘れることが出来ない。忘れるわけにはいかない。  
忘れてたまるか。

伯母に手を引かれてやってきたアキラは、それはもう見目麗しい  
お子様だった。きらきらでにこにこだった。

伯母から離れたアキラは俺の隣にちょこんと座った。えへ、と愛  
らしく笑ったりもした。

あきらくんと仲良くするのよ。

みーくん、あきらをよろしくね。

はあい。

俺たちは良い子の返事をして、子供部屋を出て行く母親、Sの背  
中を二人で見送った。

そこまでは良かった。そこまで良かった。

ぱたん。

世界が遮断された音。

その瞬間、扉の裏に貼ってあったキャラクターもののカレンダー  
が、ものすごい勢いで左に傾いだのを覚えている。

ドロップキックをかまされたのだった。

アキラはとんでもなく強かった。

あの細腕のどこにそんな力が隠されているのか今でも謎だ。しかも見た目は王子様だ。きらきらでにこにこだ。「ぼく虫も殺せません」みたいなオーラを身に纏いながら平気で拳を落としてくる。こちらが無抵抗でもお構いなしだ。

きらきらににこにこばかすかばかすか。もうなにがなんだかわからない。

半べそかいて歯をくいしばって耐えるばかりだった俺がようやく反撃を思い至った時には、アキラは手どころか足も頭も出していた。アキラは可愛い顔して石頭だった。

アキラはなかなか賢かった。

訂正、かなりずる賢かった。アキラは俺と自分以外の誰かがいる場所では絶対に手を出さなかった。

あれは一種の超能力だと思う。まるでスイッチでも入ったみたいに、一瞬にして消える表情。怖いくらいにぴたりと動きを止める腕。掴み上げていた俺の胸倉をぱつと放して、乱れた服をちよいちよいと直して、その場にすんと座り込む。

その豹変ぶりにこちらが目を丸くしていると、こんこんと扉が叩かれおやつとジュースを持った母親が顔を出すのだった。

伯父夫婦も俺の両親も、アキラの奇行にはまったく気づいていなかった。アキラは実に周到だった。俺の身体に痣をつくらない程度には加減していたらしい。

証拠は一切残さない。それがアキラのやり方だった。

アキラが嫌いだった。

強いし。めちゃくちゃ強いし。ぜんぜん敵わないし。そしてなにより楽しそうだし。それが一番気に食わなかった。

ほかすか殴りながらアキラはずっと笑っていた。あははは、声を上げて笑っていた。なにがそんなにおもしろいんだ、いってみろばかー。俺がムキになるとますます笑った。だってたのしーんだもん、ほかすていったほうがばかなんだよばかー。ほかすかほかすか

+ - + - + -

「あ、そうだ。ねーねーミコトー」

僕の座布団になっていたミコトは答えなかった。手足をじたばたさせて悔しそうにうーうー唸ってる。

座布団が動いちゃジュースが飲めないじゃないか。

「ねーきいてってばー」

ミコトはまだじたばた動いてる。最近わかったことだけど、ミコトは意外と諦めが悪い。ミコトのぶんのおやつは手が届きそうで届かない最高のポイントに置いてあるから、いくら手足をばたつかせたって無駄だ。これも最近わかったんだけど、ミコトは意外と頭も悪い。

「きのーね、ミコトの夢みたんだよー」

勝手に話を進めることにした。反応は無いけどちゃんと聞こえてるはずだ。聴いてるはずだ。

諦めも頭も悪いけど、ミコトは優しい子だから。

「ミコトがねー、僕んちの玄関のトコに立っててねー」

「……アキラんちどこか知らないよ」

「夢だつて言ってるじゃん。夢だからなんでもありなんだよ」  
べちん。

「えっと、どこまで話したっけ。ミコトがバカ言うからわかんなくなっちゃった」

「……………おれのせいじゃ」  
ばちん。

「あーそうだ。ミコトが玄関の前に包丁持って立っててー」

あれ、変な空気になった。なんでだろ。

ミコトはぐるりと首を巡らせて僕を見る。おかしい眼をしていた。  
驚いてる？ 怒ってる？ よくわかんないよミコト。変なの。

僕は笑ってるよ。見てわかるよね？

「でねー、ぼくのこと、ぶすーってー！」

ミコトはきょとん、とした顔のまま黙っているだけで、僕が思う  
ような面白い反応を返してはくれなかった。

つまんないなあ。

おばさんは手作りのクッキーを持たせてくれた。またきてね、つ  
て笑って言った。はあい、と僕も笑って返す。

おばさんがほんとうは僕のことをどう思ってるか、なんてそんな  
むずかしいことはわからない。ひょっとしたら僕が帰ったあとでい  
つも「もうあの子はおうちに呼んじゃいけません」なんてミコトに  
言ってるのかもしれない。ミコトはなんて返してるんだろっ、「う  
んもうぜったい呼ばないでもあいついつも勝手にくるんだ」、たぶ  
んこんな感じだと思う。

カタチだけのあいさつ。そんななかでもミコトはいつだって正直だ。おばさんのカゲに隠れて僕のことをじいーつと睨んでる。よくわかんないけど、「オヤのカタキでも見るような眼」ってこういうのをいうんじゃないかな。

でも、今日のはちょっと違う気がする。なんだかしょんぼりしてる気がする。らしくない。

そんなんじゃ「僕を玄関で待ち構えるミコト」にはいつまでたってもなれないじゃないか。つまらない。

今日もうちには誰もいなかった。

僕を待ってたのは茶色いお札が何枚かと「きょうもおそくなります」の紙が一枚だけ。

ミコトはいない。包丁もない。  
だれもない。

いつになったらきてくれるんだろう。  
いつかはきつときてくれるんだろう。  
ぼくのことしかかんがえていないだれか。  
ぼくのことをかんがえてくれてるだれか。

ぼくのことを、

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8762m/>

---

サンドバッグの夢を見た

2010年10月9日06時12分発行